

2025. 4. 20 (日) ルカ24:1~12

24:1 週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に来た。

24:2 見ると、石が墓からわきに転がされていた。

24:3 そこで中に入ると、主イエスのからだは見当たらなかった。

24:4 そのため途方に暮れていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着た人が二人、近くに来た。

24:5 彼女たちは恐ろしくなって、地面に顔を伏せた。すると、その人たちはこう言った。

「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。

24:6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出さない。

24:7 人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」

24:8 彼女たちはイエスのことばを思い出した。

24:9 そして墓から戻って、十一人とほかの人たち全員に、これらのことをすべて報告した。

24:10 それは、マグダラのマリア、ヨハンナ、ヤコブの母マリア、そして彼女たちとともにいた、ほかの女たちであった。彼女たちはこれらのことを使徒たちに話したが、

24:11 この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった。

24:12 しかしペテロは立ち上がり、走って墓に行った。そして、かがんでのぞき込むと、亜麻布だけが見えた。それで、この出来事に驚きながら自分のところに帰った。

#### <説教>

先主日に読みました23章の終わりに、こうありました。〈この日は備え日で、安息日が始まろうとしていた。イエスとともにガリラヤから来ていた女たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスのからだが見届けた。それから、戻って香料と香油を用意した。そして安息日には、戒めにしたがって休んだ〉(23:54-56)。ここに書かれている「休む」は「沈黙する、静かにする」という意味です。時は出エジプトを覚える過越の祭りの時、その最中の安息日でしたから、本当は格別に喜ばしい、神への感謝と讚美に溢れた安息日のはずでした。しかしこのときは、彼女たち、またペテロを初めとする使徒たちにとっては「イエスが殺されてしまった、死んでしまった」という悲しみの安息日だったことでしょう。

と同時に、彼女たちは早くこの安息日が終わらないかとそわそわしていたようにも思えます。彼女たちは、安息日が明けた〈週の初めの日〉つまり日曜日の〈明け方早く〉に〈準備しておいた香料を持って〉イエスのからだが見届けた〈墓に来〉ました。〈彼女たち〉とは、先に見た〈イエスとともにガリラヤから来ていた女たち〉、更に遡って〈ガリラヤからイエスについて来ていた女たち〉(23:49)でした。本日の聖書では〈マグダラのマリア、ヨハンナ、ヤコブの母マリア、そして彼女たちとともにいた、ほかの女たち〉(24:10)と書かれています。彼女たちは〈イエスに油を塗りに行こうと思ひ〉(マルコ 16:1)、準備しておいた香料を持って墓に来ました。死んだイエスのからだに油を塗って差し上げる、

それが今や彼女たちに残された最後の奉仕だと考えていたのでしょう。イエスを見るのは（もはや死体でしかないが）これが最後、これでもうすべてが終わり、と自分たちを慰め、気持ちにけりをつけるつもりだったのかもしれませんが。彼女たちは〈ヨセフの後について行き、墓と、イエスのからだが見られる様子を見届けた〉(23:55)のですから、墓を間違えることはあり得ませんでした。

そして彼女たちが〈見ると、石が墓からわきに転がされてい〉ました(24:2)。墓の入り口にとっても大きな石で封印がされたことはマタイとマルコの福音書に記されています。また道すがら彼女たちが「だれが墓の入り口から石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていたとマルコの福音書(16:3)には書かれています。しかし、そんな心配は無用でした。神がその石を取り除けてくださいました。〈主の使いが天から降りて来て石をわきに転がし〉たのです(マタイ 28:2)。

それで彼女たちは〈中に入る〉ことができました。そして見ると〈主イエスのからだは見当たらなかった〉(24:3)のです。先に見ましたように、彼女たちはイエスのからだが見当りなく確かに納められる様子を見届けていました。しかしそれが見当たりません。

彼女たちは〈そのため途方に暮れ〉るほかありませんでした。なぜ主イエスのからだが見当たらないのか、考えても自問しても彼女たちには全くわかりませんでした。それで神は続けて御使いを彼女たちのところにお遣わしになり、教えてくださいました(4)。

突然の御使いの出現に、〈恐ろしくなって、地面に顔を伏せた〉(5)彼女たちに対する御使いたちの告知は、人間には思いもよらないこと、考えもつかないことでした(5-7)。しかしそれは、かつてエルサレム郊外の羊飼いたちに告げ知らせられたのと同じ「大きな喜び」の告知でした。御使いは十字架で死なれ、墓に葬られたお方、主イエスを〈生きておられる方〉と言いました。イエスはどのようにして〈生きておられ〉、墓の中にはおられなかったのでしょうか。それは〈よみがえられた〉(直訳:「よみがえらされた」「起き上がらされた」)からです。イエスは人として完全に息を引き取り、死なれ、墓の中に寝かされていたのに、神の力によって起き上がられました。十字架に磔にされ、死んで、びくりとも動かず、アリマタヤのヨセフによって墓に納められたからだを持って起き上がられました。人間として二度と死ぬことのない、死に打ち勝つ永遠のいのちを持ったからだでイエスはよみがえられました。そういう人間として〈生きておられる〉唯一の人としてイエスはよみがえられました。そして墓の中から外に出て行かれました。だから〈ここ〉、墓の中には〈おられません〉でした。そういうイエスを、相変わらず墓の中に納められている他の〈死人(複数形)〉たちと同じ考えていつまでも墓の中で捜しているとは一体どういうことか、と御使いは彼女たちを叱ったのだと思います。

とは言っても、「人が死んで墓に納められたらだれもその墓から生きて出ることはない」というのが世の常識です。よみがえって墓から出て来るなど人間には到底考えられません。たとえイエスでもそれは無理だと彼女たちは考えていました。なのにどうして御使いから叱られなければならなかったのでしょうか。それは、実は彼女たちは前に既にイエスの死とよみがえりのことをイエスから聞かされていたからです。御使いは言いました。「まだガリラヤにおられたころ、主が(あなたがたに)お話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」と。ガリラヤでのイエスの予告は9章22節に記されています。もしイエ

スの死とよみがえりについてそれまで何も教えられていなければ、彼女たちは叱られることはなかったでしょう。しかし彼女たちは既に聞いていました。しかしそのことを確かに忘れていました。だから御使いは「主があなたがたにお話になったことを思い出さない」と言いました。神が御使いを通して彼女たちにそうお語りになったのです。

その神の語りかけのことばを聞いて、〈彼女たちはイエスのことばを思い出し〉ました(8)。〈そして墓から戻って、十一人とほかの人たち全員に、これらのことをすべて報告し〉ました(9)。こうして彼女たちはもう途方に暮れるということはなくなりました。そして彼女たちのうちに、イエスが確かによみがえられたという信仰が生まれつつあったことは間違いのないと思います。それは主のみことばを忘れていて、途方に暮れていた彼女たちに対する主のあわれみ、恵みでした。

なお、使徒たち（彼らもちろんイエスの死とよみがえりのことをイエスから教えられていましたが）は、このときはイエスのことばを思い出さず、意気消沈し、彼女たちの話をばかげたこととし、信じませんでした。かろうじてペテロが墓に行きましたが、なおも不明のままでした(10-12)。やがてよみがえりのイエスと出会い、イエスのみことばを改めて聞いて後、彼らにもイエスのよみがえりを信じる信仰が生まれたのです。

死に打ち勝たれたイエスのよみがえりを信じる信仰は、私たちのうちにも本来ありません。そのままでは死を恐れ、または死を無視して生きるほかありません。そんな私たちがイエスのよみがえりを信じる信仰は、やはり「イエスのからだは納められた墓が空になったこと」、また「人の子は必ず…十字架につけられ、三日目によみがえる」と言われ、その通りになられた主イエスのみことばとみわざを、聖書を通して読み、聞き、聖霊の力によっていつも思い出さずから生まれるのです。